

の分類の専門家で、大滝氏は同大学皮膚科講師を経て現在は九段病院皮膚科医長で動物が原因である皮膚疾患の権威である。

本書は1991年加納六郎氏の東京医科大学学長退官記念出版“日本の有毒動物”の海外編といったものである。したがって内部寄生とは考えられないほとんどすべての動物が網羅されていて、外地に出かける人ばかりでなく外地との交渉の多い国際港や国際空港に関連のある業務に携わる人々には必携の書かと思われる。著者も在職時代海外に社員を派遣している商社、あるいは船舶の積み荷から発見されたサソリやヘビの問い合わせを調べるのに骨折ったことを思いだし、もっと早く出版されているべきものと思った次第である。内容は国内外の関係動物の原色図版19頁から始まり、動物群と習性によって13項目に分けられ、第1章は節足動物で、第1節は吸血昆虫カ・ヌカカ・ブユ・サシチョウバエ・アブ・ハエ・シラミ・トコジラミ・サシガメ・ノミ・スナノミの11種があげられ、それぞれの媒介病と刺咬症が述べられ、その一部ではあるが重要な媒介病とその媒介昆虫の世界的な分布図が示されていて、出張先で注意すべきものをあらかじめ調べることもできる。次の節は皮膚に寄生するアフリカのゴブバエと中南米のヒフバエの解説で、第3節は皮膚炎の原因虫で、ドクガ・イラガ・カレハガと南米のヤマユガと、カミキリモドキ・マメハンミョウがあげられていて、第4節がハチとアリの刺症被害を与える虫で、ここまでが昆虫類である。第5節はダニで、感染症媒介ダニが主眼で、なんと9つもの感染症が紹介されていて、寄生・吸血ダニは国内のものと変わらない。第6節はサソリ、第7節はクモで、この辺は国内では見られないグループなので、一応勉強しておくことをお勧めする。第8節はムカデ・ヤスデ・サソリモドキの解説があり、ここまでの節足動物は終わる。以下クラゲ・イソギンチャクの腔腸動物、ヒル・ウミケムシの環形動物、ウニ・ヒトデの刺皮動物、イモガイ・ヒョウモンダコの軟体動物がつづくがそれ程重要とは思えない。最期の脊椎動物では刺毒魚類としてエイ・オコゼ・カサゴ・ゴンズイなど、咬み付くサメやウツボなどがあげられ、両生類にドクガエルに触れ

ているが、最大の危険動物は毒トカゲと400種もある毒ヘビで、毒蛇対策は応急処置までかなり詳しく述べられており、熱帯、亜熱帯に出かける前の心得として一読しておくといえる。今日では日常の食品さえ輸入品の時代であるから、PC業の方々もこの程度の海外の衛生動物に関心を持つ必要があるかもしれない。（奥谷禎一）

石川良輔：昆虫の誕生 B6変形（新書版）
210頁（中公新書1327）1996年10月刊 ¥700

著者は九州大学大学院で昆虫学を学び国立科学博物館を経て東京都立大学理学部自然史講座教授をつとめ、94年定年退官された方で、ハチ目とコウチュウ目の分類学が専門でカタツムリなども詳しい。理学博士。

本書は副題として“一千万種への進化と分化”と付けられているように、現在地球上に生きている昆虫類の目間の新しい分類学的見地の解説である。内容は3章に別れていて、第1章は昆虫類の属する節足動物の分類についての考え方の変遷と節足動物全体の説明であり、第2章が本論で162頁をしめ、第3章は“昆虫の多様化”と題し、形態と生活との関連の解説がされている。

昆虫類の目の分類学的考察についての解説書は余り多くなく、せいぜい不完全変態と完全変態がある程度の知識しかなかった著者にとっては、まず最初にトビムシという昆虫を知ったときから始まった。一応昆虫類の腹部は10あるいは11節であるはずなのに、どうして6節しかないものかという命題であった。これらの知識はImms（1934及び1977）、Weber（1949）、素木（1954）らによったが、その後化石昆虫の研究が進み、昆虫類の目の類縁関係の検討は飛躍的に進んだが、触れる機会に恵まれなかった。Ross（1982）は“A Text Book of Entomology”に系統図を示し進化過程を簡単に解説した。しかし和文での解説は高価な図書の一部や馴染みの薄い雑誌に書かれていることが多く、今回比較的低廉な本書によってかなり詳しく目のグルーピングと一緒に、どんな形で分化していったかが理解できるように図も豊富に使って解説されていることは有り難い。次に本論を少々紹介しておこう。スタートは古い型の昆虫か

ら有翅昆虫の始まりと続き、原始的な有翅昆虫であるカゲロウとトンボの説明があり、新型の翅をもつ新翅類をカワゲラ系と直翅系に分けて説明している。続いては新しい交尾器の発達と吸収型口器の発達が述べられ、チャタテムシやカメムシ・ハチ・ハエ・ノミ・ガなどの説明が続く。第3章は昆虫の多様化の中心が口と翅の変化すなわち特殊化によるとした考え方にに基づき、1000万種にも及ぶ多様化がおこったと解説されている。著者は翅についての異論はないが、口器については食性の拡大による現在の地球環境への適応が一義的なものではないかと思っている。少々気になるのはもう少し生活史や古い時代の考え方などの問題点も指摘して欲しかったし、海水生の昆虫がない点などももう少し詳しく解説しておいてほしいような気がした。

家屋害虫防除だけを考える上ではあまり必要な知識ではないが、昆虫全体を知る上では欠かせない学問上の問題として、機会を見て目を通しておくことを勧める次第である。(奥谷禎一)

安富和男：詩の中の昆虫たち B6, 235頁, (三一書房 1997年4月刊) ¥800

著者は九大卒業後長らく勤められた予防衛生研究所の衛生昆虫部を定年退官され本学会の常任理事としてご活躍されている事はご存じの通り。

本書は副題に“虫たちのコミュニケーション”とあるように、昔からの俳句や和歌に読まれた虫の習性のうち、とくにコミュニケーションに関係するものを集め、現代の科学的な解釈を与えた随筆である。虫のグループによって9章に分けられており、問題となるモニタリングのヒントもかなり含まれているので、関心のある方は一度目を通されてもと思われる。以下に少し内容を紹介しておこう。

9つの章は、秋の鳴く虫・セミ・カ・ホタル・アリ・チョウとガ・トンボ・ハエ・テントウムシで、まずそれぞれの虫のコミュニケーション法、その仲間のあれこれ、彼らの生活や人とのかかわりの3節が基本となっていて、初めの2章だけは余分の節を設け変化をつけている。そして多くの章では初めに有名な俳句か和歌が引き合いに出て

きて読者の興味をそそる。まず感心させられたのはこれだけの虫と関係のある詩を探してきた努力である。人口に膾炙されているもの以外関心のない我々にはとても探し切れないと思われる。第1章では虫の声を聞き分ける能力が日本人はヨーロッパ人に比べ勝っていることで、恐らくヨーロッパにはセミも秋の鳴く虫も少ないので子供の時から訓練されていないからではと思っていたが、言語脳で聞か非言語脳で聞かかの差であるとは驚いた。日本語にははっきりしない表現が多いので、科学的記載に向いていないといわれるのと似ているのかなとなんとなく思われる。また歴史的にはコオロギとキリギリスは混同されていて、江戸時代のキリギリスは今日のコオロギであることは、キリギリスと一緒に寒さに関連した言葉が出てくるのでコオロギらしいとは分かるが、残念ながら語源の考証はない。セミの章では、筆者も東京で初めて1匹のヒグラシの声を聞き鳥と間違えたので、白人がツクツクボウシを鳥と思ったのは無理もないことと思うが、白人が鳴く木が欲しいといって困ったという話よりまだましかなと思ったりした。カの章では、チカイエカの日本での発見は筆者の学生時代のことで、当時アカイエカを飼育していた利岡さんが恒温器にいった腰高シャーレを調べていて、吸血させていないのに僅かではあるが産卵が見られ狐に騙されたような顔で話されたことを思い出した。ホタルの章では、肉食のホタルが人まねをして他のホタルを集める話しかから、ヘイケボタルが車のウインカー点滅に反応するという話しもあったらと思う。アリの章ではもう1節のシロアリとの区別が欲しかった。チョウとガの章は、彼等は詩に読まれることが多いが、フェロモンに関連する作品は少ないようで昼行性のチョウは翅の模様や反射光で、夜行性のガはフェロモンで交信しているらしい事が分かる。トンボは日本が秋津島といわれるようにトンボの種類が多い国で、大型でもあるので詩に取り上げられていることは非常に多く、交尾から産卵に至る色々な行動が読まれている事がわかる。ハエの章では、五月蠅と書いてウルサイと読むほど人のかかわりのある虫なので取上げられた詩も多いが“はえが手をする足をする”から始まって、詠ま